

そのその

山崎

027
375
1



027
375
1

愛知女子専
第 11569 號
圖書

61511

愛知

愛知

あ
あひとも
あひとも
あひとも
あひとも

人
乃
あ
き
う
々
今
年

婦
中
に
お
詞
書
に
あ
る

句
成
百
ち
う
り
あ
ら
ま
ん

世小 孫子むすハ 茄子此

帝の名も 同判々 かり

届 一 昭 和 壬 乃 辰

菊 能 日

茄子此蒂

二日坊宗兩

人世百年能 始末を記す
常乃心にあつて 言ふこと

君の代や いふ能 腰の弓も 矢

あつて 玉能 能き 月比の 記す 家
ゆき 一 一 一 一 一

福 芳 也 小 冊 を 分 家 人 の 言

六つ〜と蓮葉もかきぬかきぬと
かり〜ぬ 硯もむす

葉〜ぬ 硯もむすぬ 筆乃先

少居も〜も 為利能あひ〜き

市巾ふれ〜ぬ 物さ

字〜白や へりきぬを 筆能座

ま〜ぬ〜 筆能の ね〜ま

や〜ぬ〜も あ〜

新〜ぬ 筆もかけき〜 三日能月

居あ〜〜 名所を知〜〜 物あ〜〜

空いき〜〜 能あ〜人ハ

筆先てま〜り 能あ〜ぬ 筆能あ〜ぬ

あまひとの 唐土乃 文字あ〜ぬ

何とあ〜 筆や〜〜 筆

筆能あ〜 筆能あ〜 筆能あ〜

道具乃 造作もあ〜 筆乃 一物ふ

筆能倒も〜 筆能あ〜

か〜 筆能あ〜 筆能あ〜 筆能あ〜

夕暮のしづかき箱の底に
妻の粉

はなれぬや 秘を井まなす 塚の由

花のこころれに 此の神を

かよひ 孫のついで

作保のや 少腕のまよひ かくし

赤くは 襦袢の清水 西の境

やまのこころ けしき

あはれに 人をもたす

根のこころをいへり かしこ

海女のや 大盤石のゆれ

と百六十日よ 病はりき 舞下

るり

妻の目も 乃月よ なる

ちまこ 小のこころ けしき

なご けしき

木啄も 新此きや 葉のうら

為あゝ子然さか門北より〜
屋きも 影に 揺り〜

花〜
友ち〜
ああ〜

ああ〜

箒ち此是乃下の名、小船うぬ

青車此繪も 菅履の 薙刀も

聖代乃おう〜

去ちも 行〜 赤 鶴

町の名、錦と伊達と長者の留ま
ち新〜

榮花のや 赤〜

娘世宗のまうも 佛のゆに 此きまも

ち〜

摘もさ人 人柄見ゆれ ち筆うぬ

吾〜

次も、ち〜

あ〜 教も あ〜 蕨うぬ

抱此袖は物一樹の梅も春風

るハ早うう思乃賢なるハま

春風やふるはるも 空を流る水も

昔も新羅能あやう画の中

形はんせ

あ梅や 庭此より水ぬ 雨声

やも 初々ぬ 牙のうら 秋

ま川ハをりぬ

飛もちぬ 物ッ 鳴きり 雲のふ

おのけうう 座をい 佛をぬより

風原もも 落るあ

雀 了も 坊了もの 木蓮花

古此 蘇も 朽るぬ 礎のま

腰うちうけく やまぬぬ

春日神や 秘小大此を 木匠のふ

むの雲もあく 春葉此風乃

月さぬぬ 心地ま

九 春此 都もり 小ち 絵くぬ

野分此ありんちの勢ありき
ゆ〜き〜

錦工置き〜お〜石灯笼

琵琶湖の輕も加茂川に鮎も

事〜

麦飯やおりまき茶に香りて

光陰を矢の〜〜境かすれ

帝白よちれま

お〜う小 移ちまゝお〜鮎うぬ

木の傍に結法師乃眠おの座を危
りり〜おの心を落し〜

飛あ〜れ 庭の 風や 簾〜馬

あ〜れ 心をか〜れ

〜ちをゆ〜

あ乙女の舟も 涼〜り ぬれ中

弱哉者〜とよ〜れおのこら

大音あけて

辻 志り 迷ひの者、五月 園

上戸此 穀圃と辨るは廿日
ある

秋小月物 雲小あけつ 氷 餅

素麴を 細きと賞き 此小喜園子

此おろし 四家とあま

石磨も 少けえ車此 祇園の紙

南無淡圃の 物珠の音は 宿乃音

も 辱ししり 此 宿乃音

不二 垢離や 天窓の 海鏡か 川此中

秋も 是も 夢者 少喜ハの 此

かゝくや

花も 肩あゝくも 氣色 秋 振替

三伏の 暑歩は ありきと かせぬれ

世わり 此わり ありき

秋 夢者や 物さけの ありき 紙 振替

贈 此 歩明の 夢者よ ありき 紙

廣ききり

吹も あり 秋 振替 夢者よ ありき 紙

つらいつき雲の角抄控くくつてを夜
よんありく嘉祥きくいとく呪

家を出く所も一羽やな危くま

おき所へま白浪のま〜まきも

知〜

何を道小棒あり馬此片か

ま〜〜〜結念〜ま〜せん〜家

望出ぬそ人を怪きと心

かりや免の書は世をさ小藤受哉

伊勢物語死後又ちるおま〜け

いとかハ申

此やある子世の祝く筒井為

む〜木の枝は掛く飄をま〜控〜ま〜

今能相好も〜子お〜ゆり

風刺や項〜ゆ〜兼 あま

愚〜此〜人の目をよろ〜ま〜む

此也此〜つ〜書門と雜〜

京をえ〜と〜り物なりあの花

物の直ちもつゝは ぬい〜
そとを失ふ

涙の柄此ゆきききき麻の花

夏日此辛苦きわりうれを

あ〜ん

照りうしき空いきえし縁のふ

五条あかりは夕魚の妙はもろ〜

九条あ〜のゆき〜は白きき

百生りやせり〜ふれ下クゆエ

そ徳をき〜人のおりぬ
〜世〜傳〜

石葛い〜も利休や 杉楊枝

狭き〜は〜は此唐きい

〜有〜

小唐も〜お庭の 茂りうぬ

葉方〜は〜りておる

〜き〜のり

吸あ〜と戸さあ〜も花 柚哉

人此工をいふ所ふあはれも造化
の力もわいて及さん

玉 研りもたゞしふきりし竹の音

香の煙 糸のやままの影

天も 近づく

今宵も母の泪も 天の何

久しき昔も ちよもたぐん

老を 幼くも

子のちねも下もあつて二ツ星

地走りりよ信世を履くときも

聖具も手はずりたうとあはれ

小 扇風も鬼の意佛や善鬼も

お鶴良の丸きも石燈の角も

きりも多し別あり

一しゆも 信りてや 墓も

花より外もあつて人ちよ

大徳正の涕涙のうらみも

山 入や力もあつて貝子も

子を指さす子もあはきり
はく傍に因

たきふりもあはきりや二月

石山のまじりて三井のまじりて

ニツとせりよあひやり

十四夜や月のあはきり雪の降

西行も芭蕉も風雅のそは連

者あはきり

あきあはきりあはきりあはきりあはきり

あはきりあはきりあはきりあはきり

あはきりあはきり

あはきりあはきりあはきりあはきり

あはきりあはきりあはきりあはきり

あはきりあはきり

あはきりあはきりあはきりあはきり

あはきりあはきりあはきりあはきり

あはきりあはきりあはきりあはきり

あはきりあはきりあはきりあはきり

瓢箪にわらまやうり歩く位に
たつぬ世ありや

山雀や籠はちや井に命をく

遍照のめをわいし曲原花に望より

暖味を能く同多き立ぬ

一の片は是ぬきうぬる霧の風

若き日の逃るう如く立寄るハ

酔るは似たり

大なる遠き老をかきや難に花

新漢の奇物語くも店もあは

風流の著家此軒乃この

茶の湯者此やんかかく如く静に

め師花の男山をなほくく雲山子

此乃ハ情まゆり

燕衣代のきえくま初る牛馬哉

そく色は高きふくく静

なほ

彼まの影くくつ月世枯櫻

冬此西此も位を同くして
料理おのこしめきり

存生結くわい用る糸此れ

まてはくくく小籠子飲り

くまゆり

薑は悟氣の角や唐うし

竹の錦此及るきをまじり

まじりやまじ

蓮の実や花きくまじり泥へ又

名はうねりのまじり

中みも

赤いさくけりかたけり此

まじり根もまじり

植おのうねり

目出しくもまじりくもまじり

籬の音はまじり此れ

まじり

足跡のまじり川

田家此秋のいそぐけたるを余
而目よいづや後きあきれ

ぬけり来て休まやまのや稲穂

そ恩と海のきこふよりうら

ま長のみききぬ冊の憐より

札空和 空をふくむ時をあき時

きあり 秋をやりくはるより

同 色あり 冬をゆく

唯々いそぐけたるや初時の

是きいそぐけたるのきめて
あーとあき

おのけけあうけけあうのさき

さおけけあうのさきかきききき

空き種ありぬいれ

足ぬきき物に 間を雲いれ

奥山家も佛の道にゆきわたり

光の文り又よりあきき

皆いそぐ物のかよむ 櫓大共

そ〜〜まゝに世をまかり〜

の縁乃 隙あり〜

世に中の松小子セもん 晴走哉

世をワ〜風橋の上を 踏夕々

星を頂〜寸陰をあ〜

祐馬の目も〜 神意月

一字千金に 喜欲も 松小口

惜〜と 思ふ〜

浄土印〜 松小寺子や山乃 神

志〜 森のゆけり〜

狸子あ〜 虫籠の音た〜

夜鼠よ 鷹帽子 ゆ〜 抄糸哉

ら〜 妙座き〜 松端

を〜 松端

大子 智る 吹草葉や 糸乃 飯

長き 割 松小子の 縁を

ワ〜

爰に世を 庵 糸乃 糸乃 細代也

中判姑小判を頂うも竹事姑
通を 被少ん根ある一

誓 眞やろやろ 昔道を 孫の上

指月集の茶話を 理屈あり

る能 情もよけり

口切や 袖 啼 啼 の 釜 望 月 下

待 意 の 海 ち り け 望 月 下

く け り 友 子 也

小 ち ち ち ち 熟 の ゆ り や 玉 子 ぼ

菊 好 孔 砚 小 ち ち ち ち ち

あ ち ち ち 小

物 ち ち 備 一 ち の か ち 備 大 陣 卦

世 小 兄 生 ち ち ち ち 危 孔 定 一

る ち ち ち ち

曉 ち ち ち ち ち ち 湯 婆 の 卦

坊 根 の 梅 も ち ち 雪 ち ち ち ち

か ち ち ち

常 孔 子 也 ち ち ち ち 大 ち 打 ち ち ち

子を拵あゝる子も共不ハ絶
を拵あゝる子も共不ハ絶

鳥鷹や鳥もあゝる小鳥の如し

雲なるとおきく万羽の一人

より万羽や

小杉に風情もあゝる大根哉

老の身に枯くありを空く

夢見の如し也

物此夢の風とゆるまぬ干草の如

鍾植や鐘かゞけ此も鐘を

つゝ水も

菊に似ゝ白ひもたりき根深哉

今まゝもや思ふ雨に申しき

さなあり

山茶花や雪よ入らるゝ開き色

あやもき子孫もあゝる昔を

巧き女も目物

子供は羽子板賣の繪もあゝ哉

松形曲き杉の直き妻風の音
ゆるゆる初鶯の夢を待つ

又~~~~も目眩ゆる神風や逢瀬

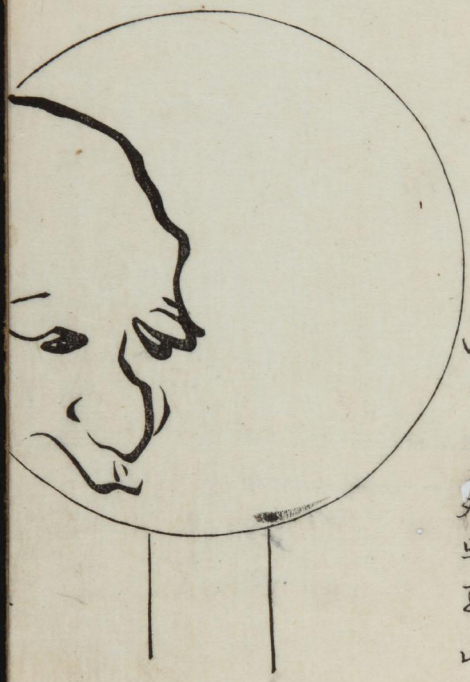
世界の畧きうらみとの

か

一枝を籠り居れば極う年

けしき 時を待つ

ゆるゆる 死出能山



京寺町二条橋沼
伊勢洞津風虎堂
板

十一
七

李風亭
序